藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

哀愁のリスボン

毎回、タイトルで悩む。タイトルを決めて書き始めても、書いているうちにタイトルとマッチしなくなる。

特に旅する前からその地についての知識がたくさんあるところは、行く前の想像と、行ってからの現実との間をタイトルが行き来する。今回のリスボンがそうである。

栄光の歴史に輝くポルトガルの首都、リスボン。バスコ・ダ・ガマやサビエルが東洋を目指して出港した港街、リスボン。一七五五年のリスボン大地震。哀愁のポルトガル民謡、ファド。イワシの香りが漂う街などなど、栄枯盛衰のリスボンには、旅する前から「哀愁」というイメージがあった。

たまたま、リスボンの「7月24日通り」という地名と同名の小説を読んだことが混迷を深めることになった。

「パーク・ライフ」で二〇〇二年の芥川賞を受賞した吉田修一の恋愛小説「7月24日通り」は、ある地方都市の風景を、まだ一度も行ったことのないリスボンの美しい風景になぞらえて暮らすことで、現実の平凡な生活から飛び出そうとする女性の話である。

吉田氏は一度もリスボンに旅することなく、机上のリスボン市街地図を見ながら想像を頼りに書いた。

その際、強い味方になったのは、ポルトガルの詩人、フェルナンド・ペソアの「私たちはどんなことでも想像できる。なにも知らないことについては」という言葉だったという。

確かに「想像する」ことはすごい力となる。が、なにも知らないことを想像できるだろうか。表現の問題だろう。

実際には一度も訪れたことがない場所を、活字などで知り得た知識で想像することは旅を豊かなものにしてくれるのは確かだ。

「7月24日通り」は小説のようにロマンチックなものは何もないただの産業道路だった。

リスボンと対岸を結ぶ全長一二・〇キロに及ぶ「バスコ・ダ・ガマ橋」。一九七四年のクーデターを記念して命名された全長二千二百七十八メートルの「4月25日橋」は普通の近代的な橋である。が、夜、もやにかすむ橋は歴史を想像させてくれる。

リスボンは坂道が多い。坂の上の町と下の町を結ぶ古めかしいケーブルカー。電車の通らない坂道には中央に手すりがついている。坂の上から下を見ると向こうに海が見える。平坦な道に比べ、坂道には哀愁がある。

これに名物といわれるウロコのついたイワシを焼くにおいがあれば想像通りである。

結局、今回のタイトルは「哀愁のリスボン」とした。無理矢理に、想像と現実を一致させようとしている自分に気づく。

ポルトガル民謡のファドを聴きに行ったが、隣のテーブルの男性が酒を飲みながら大声で話すので、せっかくの哀愁の歌声も台なし。人生はままならない。

小説の最後に「間違えないようにと、じっと動かずにいるよりも、間違えて、泣いてもいいから、ここから動き出してみようと思った」とあった。そこに想像にない力を感じたのである。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

老人が演奏するファドには哀愁があった

階段の坂道は不便だが哀愁を感じさせる